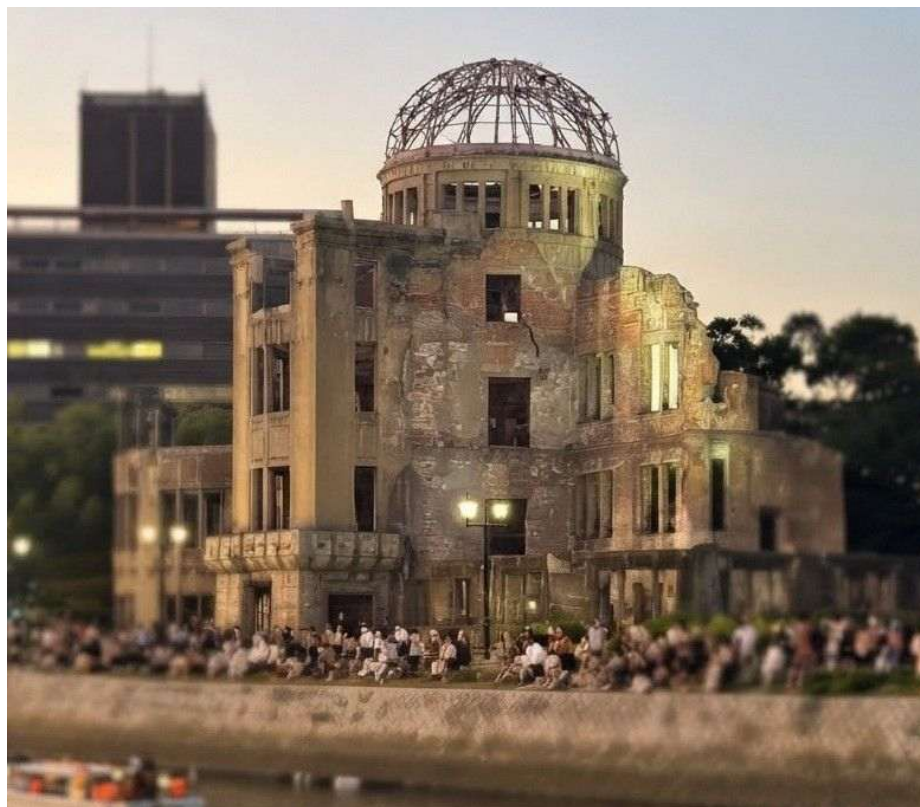


新潟市平和推進事業

令和8年度

広島平和記念式典等派遣事業感想文集



新 潟 市

発行にあたって

新潟市では、平成 17 年 10 月 10 日に「非核平和都市宣言」を行い、環日本海の友好・交流の拠点都市として、世界の恒久平和と核兵器の不拡散・廃絶を願い、さまざまな平和推進事業を実施しています。

その一環として、毎年、広島市で開催される広島平和記念式典等に市内の中学生を派遣しています。現地でしか感じるることのできない原爆の被害や戦争の悲惨さ、平和の尊さについて深く学び、認識を新たにするとともに、その体験を次の世代へ語り継いでいくことを目的としています。

今年度は、公募により選ばれた市内の中学 2・3 年生 24 名と、市職員の引率者 3 名、添乗員 1 名、看護師 1 名の計 29 名で、「広島平和記念式典等派遣事業」を実施しました。

また、派遣事業に参加した中学生は、戦争被害が最も大きかった 8 月 10 日に毎年行われている「平和祈念碑献花式」にも参列しました。式典では、新潟市がかつて原爆投下の候補地の一つとされ、一時的に市民が避難して街から人がいなくなったことや、強制連行された人々、捕虜となった外国人が新潟の地で多く命を落としたことなど、新潟市における戦争の歴史について学びました。

このたび、当事業に参加した中学生が、現地で見て、聞いて、感じたことをまとめた感想文集を作成しました。

この文集を通して、一人でも多くの方に戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて感じていただくとともに、戦争の記憶や事実が風化することなく、平和への願いとともに後世へ語り継がれていくことを願っています。

目 次

1	日程表	1
2	参加者名簿	2
3	参加中学生による感想文	
	青木 望華 (山の下中学校)	3
	池田 瑠衣 (白根第一中学校)	4
	石井 章雅 (新潟大学附属新潟中学校)	5
	大竹 六花 (宮浦中学校)	6
	奥田 千明 (臼井中学校)	7
	小野 栞 (葛塚中学校)	8
	岸 夏未 (五十嵐中学校)	9
	北 愛梨 (月潟中学校)	10
	小池 菜々音 (木崎中学校)	11
	近藤 ことみ (小針中学校)	12
	坂井 孝乃介 (高志中等教育学校)	13
	白崎 海 (黒崎中学校)	14
	関谷 謙仁 (下山中学校)	15
	高橋 こずえ (濁川中学校)	16
	高橋 凜 (新津第一中学校)	17
	多田 楓 (関屋中学校)	18
	永井 空睦 (巻東中学校)	19
	間 煌大 (濁川中学校)	20
	長谷川 純 (上山中学校)	21
	福島 祐宇 (東新潟中学校)	22
	藤島 倖暖 (味方中学校)	23
	藤田 翔 (内野中学校)	24
	本間 あさひ (新潟明訓中学校)	25
	丸山 奈緒 (新津第二中学校)	26
4	新潟市非核平和都市宣言	27

1 日程表

【広島平和記念式典等派遣研修事業 R8 行程表】

月日	内 容（時間及び会場等）
8/5 (水)	新潟駅 → とき304号 → 東京駅 → のぞみ21号 → 広島駅 → (貸切バス) → 06:30集合 (07:02発 09:00着) (9:30発 13:28着) ※新幹線内で昼食 平和記念公園見学 (ボランティアガイド付) → (貸切バス) → 被爆体験講話 → (貸切バス) → 14:30 ~ 15:30 16:30 ~ 17:30 広島 YMCA 本館 夕食 → ホテル 18:00 ~ 19:30 20:00
8/6 (木)	(徒歩)※バス乗り入れ不可 (徒歩)※バス乗り入れ不可 ホテル → 平和記念式典参列 8:00 ~ 8:50 05:30朝食 06:40出発 → 07:00会場入 (自治体参列者席) (※制服) (徒歩) (徒歩) 全国子ども平和サミット → 昼食 → 全国平和学習の集い → 10:00 ~ 11:40 12:00 ~ 13:15 14:00 ~ 16:30 広島国際会議場 広島国際会議場 広島県 JA ビル (フェニックスホール) (徒歩) (徒歩) ホテル (休憩・夕食) → とうろう流し → ホテル 16:45 ~ 18:15 18:30 ~ 19:45 20:15
8/7 (金)	(貸切バス) ホテル → 慰霊碑 → 原爆死没者追悼平和祈念館見学 → 06:30朝食 08:00出発 08:30 ~ 08:55 (貸切バス) 平和記念資料館見学 → 広島駅 (買い物・自由昼食) → のぞみ26号 → 09:00 ~ 10:30 11:00 ~ 12:30 (12:43発 16:33着) ※新幹線内で昼食をとっても可 とき333号 東京駅 → 新潟駅 (17:08発 18:57着) 19:00解散

2 参加者名簿

参加者名簿

氏名	学校名
青木 望華	山の下中学校
池田 瑠衣	白根第一中学校
石井 章雅	新潟大学附属新潟中学校
大竹 六花	宮浦中学校
奥田 千明	臼井中学校
小野 栞	葛塚中学校
岸 夏未	五十嵐中学校
北 愛梨	月潟中学校
小池 菜々音	木崎中学校
近藤 ことみ	小針中学校
坂井 孝乃介	高志中等教育学校
白崎 海	黒埼中学校
関谷 謙仁	下山中学校
高橋 こずえ	濁川中学校
高橋 凜	新津第一中学校
多田 楓	関屋中学校
永井 空睦	巻東中学校
間 煌大	濁川中学校
長谷川 純	上山中学校
福島 祐宇	東新潟中学校
藤島 倖暖	味方中学校
藤田 翔	内野中学校
本間 あさひ	新潟明訓中学校
丸山 奈緒	新津第二中学校

3 参加中学生による感想文

平和とはどういうことだろう。私は派遣事業に参加する前までこの問いについて深く考えたことはありませんでした。私は戦争がなく、安心して毎日を過ごせることが平和なのだと思っていました。しかし、実際に広島を訪れ自分の目で見て、耳で聞き、様々な人の思いに触れたことで、私が思っていた平和の考え方が大きく変わりました。行く前から原爆について学校の授業などで学んだことはありましたが、すごく昔のことに感じていて、今平和な時代を当たり前に生きている自分には関係ないことだと思っている部分もありました。しかし、広島を訪れたことで原爆は決して過去の出来事ではなく、今を生きる私達にも繋がっているのだと考えました。

特に心に残ったのは原爆ドームを実際に見たことです。写真で見たことはありましたが実際に目の前に立つと写真で見るのとは全く違うものを感じました。今も建物が残っている姿を見てここに原爆が落とされ、多くの人が苦しんだことを感じました。この建物が原爆時からずっと残り続けているのは、当時の出来事を私達に伝えるためなのではないかと思いました。平和記念資料館では、被爆した方が実際に使っていた物や当時の様子を伝える展示がありました。そこから分かったのは、原爆によって失われたのは建物や物だけではないということです。一人一人の生活や大切な時間、これから続いて行くはずだった未来が失われたという事が展示から伝わってきました。私たちと同じように学校へ行き、家族と過ごし、友達と笑い合っていた毎日が戦争によって失った事を知り、平和な毎日は決して当たり前ではないことを感じました。

そして、今回の派遣事業で私が大切だと思ったことは広島での学びだけではありません。最初は周りに知らない人しかいませんでした。最初は緊張し自分から話しかけることにも不安がありましたが、様々な活動と一緒に乗り越えていく中で少しずつ会話が増えて自然と笑い合える関係になりました。最初は知らない人同士だった私達が同じ経験を共にすることで自然と仲が深まっていました。この経験から相手を知ろうとすることの大切さを学びました。自分とは違う環境で過ごしている人でも一緒に過ごし、相手の話を聞くことで分かり合える事があります。自分と違う意見を否定せずに相手の立場になり考えることで争いを減らし、お互いを理解するための一歩だと思います。

被爆体験の話聞き、資料を見るだけではわからない思いを知る事ができました。実際に被爆した方の言葉には、教科書に書いていない戦争の悲惨さがありました。戦争を経験していない私達だからこそ聞いたことや感じたことを自分の中で留めておくのではなく次の世代へ伝えていくことが大切だと思います。派遣事業に参加し、たくさんの人が平和を願っていることを感じました。様々な場所から来た人がみんな同じ思いを持っていることを知り、平和は一人一人の想いが集まることで作られていくのだと思いました。

これからは広島で学んだことを忘れずに周りの人たちにも伝えて行きたいです。今回広島で学んだ平和とは「一人一人を大切にしていって違いを認め合い、世界中の人が安心して生きられること」という考えを忘れず私自身も相手の気持ちに耳を傾け身近なところからみんなが笑顔で暮らせるような行動をしていきたいです。

私が特に印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、被爆者新井俊一郎さんの伝承者である島田廉子さんの講話です。新井さんは8月6日8:15に広島を中心部に着く電車に乗る予定でしたが寝過ごしてしまったことで直接被爆することを免れたそうです。このことから一分一秒が違うだけで人生が変わることを学び、これからの生活は一分一秒を大切に過ごしていきたいと思いました。また原爆が落とされてから八一年しか経っていないけれど詳しく知らない人も増えてきて、もうこの過ちを繰り返さないために伝え続けてほしいとお聞きしました。そのため、私たちや次の世代が戦争について知り語り継いでいくことが平和への一歩になると信じています。

二つ目は、全国子ども平和サミット、全国平和学習の集いです。「平和とはなにか」を色々な人からお聞きしました。それはいじめや犯罪、差別がないこと、戦争がないことなどが挙げりましたが特に心に残った三つのことがあります。「安心して生活できること」、「人間らしい生活を送ること」、「自分だけが幸せなのではなく世界中の人が幸せと思えること」です。最後の三つ目は直接被爆してしまった八幡照子さんからお聞きした内容です。自身の経験から他の人には絶対に体験してほしいという思いが伝わってきました。また、細かく情景を話してくださったおかげで鮮明に思い浮かべることができました。けれど八一年経っても細かく説明できるということはそれほど頭に焼き付いて離れないことを戦争・原爆によって体験してしまったのだと感じました。日本人だけでなく他の国の人も辛い思いをしないでほしいという思いがよく伝わってきました。

三つ目は、河野キヨ美さんの講話です。河野さんは病院近くでもう目がよく見えないであろう少年から声をかけられ、「すみませんが水を一杯ください。」と言われ、もう生きる力がないようにみえたため最後の頼みだと感じ水を与えたそうです。それから一口飲むと息を引き取ってしまったそうです。そうして「お母さん」「助けて」とも言えないまま亡くなってしまったという話は、当時の日本の状態を表していると思い弱音が吐けない厳しい時代だったんだなと改めて感じました。そして、特攻隊に志願しなかった少年は農民の一人息子で理由を申し出たそうですが、意識を失うまで殴られたのちに「いつまでもいつまでもお元気で。」と言い残し飛び立っていったそうです。当時の日本は軍の命令が絶対であり逆らうことができない時代とわかり、このことを踏まえ悲しむ人がいないみんなが幸せと思える世の中（平和）になることを願っています。

平和のために私たちができることは、この事実を忘れずに語り継ぎ、過ちを二度と繰り返さないことです。そして何年何十年経っても語り継ぐために周囲の人に伝え続けることです。

皆さんは、原子爆弾の恐ろしさを知っていますか？ 私は、この研修に参加するまで、原子爆弾の威力や人体へ及ぼす深刻な影響については、あまり理解していませんでした。広島に世界で初めて投下された原子爆弾は、核爆弾で、その凄まじい破壊力、殺傷力で多くの犠牲者をだし、また放射線による人体への影響は、81年経った今でもなお、多くの人達に苦しみや苦悩を与え続けています。この現実を目を向けた時、改めて戦争の悲惨さと原爆の恐ろしさ、そして平和の尊さを痛感しました。

私がこの研修で心に残った事を3つ紹介します。1つ目は、広島平和記念資料館の見学です。そこには、原爆によって亡くなった方々の遺品や怪我の写真などが数多く展示されており、ボロボロになった学生服、顔に大火傷を負い目が開けられない状態の人の写真など、戦争の悲惨さと、原爆の恐ろしさがはっきりわかる展示物が多数あり、想像以上の悲惨さに言葉を失いました。

2つ目は、被爆者講話です。被爆者である新井さんは当時中学生で疎開をしていました。8月6日、新井さんは、車で広島に行く途中に原爆が投下され、車は止まり、歩いて市街地に向かう途中、辺りは焼け野原と化していて、よく見ると腕の皮膚が爪の近くで垂れ下がり、筋肉が見えお化けのような状態の人が腕を伸ばしたままで何人も近づいて来たそうです。新井さんは、市街地に入ったため残留放射線により被爆し、今まで6度もガンを発症し、原爆症と診断されたそうです。当時のことを思い出すだけでも、とても辛いはずなのに、私たちに被爆体験のお話しをして下さる被爆体験者の方々の思いをきちんと後世に繋いでいかなければいけないと思いました。

3つ目は、平和記念式典での広島市長の平和宣言の中で紹介された当時9歳の被爆体験者の訴えです。「争いが起きない世界を創る為、自分の中の争いの心乗り越え、相手の考えを受け入れる気持ちを持って欲しい、とりわけ若い世代には、その為に身近な事から考えてほしい」という、私たちの世代に対する平和の実現にむけたアドバイスとして受け取りました。家族や仲間との日常生活の中で、意見や考えの相違からふと湧き上がる怒りや不満という争いの心乗り越えて、相手の言葉に耳を傾け、お互いの違いを認め合い、受け入れる広い心を育てていくことを、まず自分自身から意識し、行動していくことが、今の自分にできる身近な平和活動だと思います。例えば、このような一個人の意識と行動であっても、個人の集まりが家族になり、地域社会になり、国になり、世界になることを思えば、争いの心乗り越え、広い心で人と接することができれば、それはやがて、世界平和に繋がる大きな第一歩になると思います。

そして、この研修で実際に自分の目で見えて聞いてきた事、感じた事を家族や学校、地域社会の人達と共有し、戦争の悲惨さと原爆の恐ろしさを風化させる事なく伝え続け、私たち一人一人ができる平和への意識と行動が世界を変えていくという期待と明るい希望を持って、自分自身が今できるこれらの平和活動を続けていきたいと思っています。

私は原爆が投下された 81 年後の広島に行った。1 日目の気温は 36 度。2 日目は 38 度、3 日目は 37 度にまで上る高温でじっとしているだけで汗が出てくる酷暑日だった。原爆が投下された当時の広島はどうだったのだろう。平和記念公園に行った。被爆したアオギリ、旧中島地区被爆遺構展示館、原爆の子の像、原爆供養塔、韓国人原爆犠牲者慰霊碑をメインに見学した。81 年前の平和記念公園は多くの人が命を絶たれた場所でもあることを噛み締めながら、恒久平和を祈る大切な場所になった。

平和記念式典に参列した。式典の 5 分前に行われた献水では、亡くなった方へ水を恵む命の水を実際に見ることができた。始まった式典は、平和宣言の後の放鳩の場面で一斉にばたいていく鳩に、今この場所は平和なんだと、言い聞かせてくれるように感じ、一瞬で見る人の心を奪っていった。平和宣言や平和への誓い、あいさつの場面では話している一語一句全てが平和への願いが詰まっているようで、大切な時間となった。かけがえのない大切なものを、また一つ手に入れることができ、日本国民として平和を一つずつ作っていかうと思った。

全国こどもサミットと全国平和学習の集いに参加した。ここでは 22 都道府県の中高生が参加し、全国の戦争の悲惨さを知れたり、日常にできる平和を築く行動はどのようなものがあるのかについて、5・6 人のグループディスカッションを行った。全員が積極的に意見を出し合うことで、話し合いが恒久平和へ近づく第一歩になったのではないかと思った。

とうろう流しをした。とうろう 1 つ 1 つには慰霊とピースメッセージが書いており、追悼と供養の思いが溢れていた。これを見て改めて今自分が平和な世界にいられていることが当たり前ではないことを実感した。火を灯し、川に流れていくとうろうは 8 月 6 日の夜を明るく照らしていた。

原爆死没者追悼平和祈念館と平和記念資料館を見学した。そこには当時の被爆した人の写真や皮膚が抜けて垂れ下がっている人たちの絵、こどもの衣服などが多数展示されていた。81 年前に原爆が投下されなければ、今も生きていられている尊い命の重みを感じた。放射線で苦しんでいる人が今もたくさんいると思うと、自分はどれだけ平和な世界に生きてこられたのかがすごくよくわかった。

この三日間で私が 1 番心に残ったことは、被爆体験講話だ。新井俊一郎さんの被爆伝承者である島田さん、実際の被爆体験者である八幡照子さん、河野清美さんの話はどれも心に刺さった。建物疎開で逃げる場所がなく直接放射線を受けてしまったこと、お菓子があると思えば袋の中を見たら知らない人の遺骨がたくさんあったこと、火傷をしている人に水を恵んでしまうとその人は死んでしまうが、最後の望みならばと、水をあげ、その人は命を絶たれてしまったこと、もうすぐで死んでしまう友達が、「悔しい悔しい」と声を上げながら命を絶っていったことなど、数えきれないほど心が痛む出来事を伝えてくれた。思い出したくないような辛い話をしてくれた方々の気持ちを強く感じ、自分たちの世代が実際に被爆を体験した人たちから話を聞ける最後の世代になると思った。だからこそその貴重な時間に教科書などでは得られない命の重みを実感できた。

派遣事業を通して、被爆体験が実際に聞ける最後の世代であり、81 年前にタイムスリップできる最後の世代だと思った。戦争があったことを過去のものだけにしてはいけなく強く感じた。81 年後の今、私ができることはこの三日間を自分だけのものにせず、多くの人に被爆者の方々の思いを伝えていくことだと思った。簡単に水が飲める時代、友達と笑いながら話せる時代、勉強が自由にできる時代に生きていけるこの平和を強く噛み締めて、尊い命を 1 秒 1 秒無駄にしない人生を歩んでいきたいと強く思った。

私は派遣事業に参加し、平和記念公園内を見学し、被爆者の方の体験談を聞きました。その中で特に印象に残ったのが平和記念公園内で見学した被爆アオギリです。被爆アオギリは思っていたよりも大きく、葉も茂っていて普通の木のように見えました。しかし、説明によると被爆アオギリは爆心地から約 1.3km 離れた、遮るものが何も無いところで被爆したということでした。爆風や熱波が直撃しても耐え、それどころか放射線にも耐えたというのが驚きでした。この説明を聞いてアオギリは生命力が高いということだけでなく、被爆したのは人だけではないということが分かりました。つまり原爆は、地球上のすべての命を奪ってしまうかもしれないという事が分かりました。

もしこの世界でまた核兵器が使われたら、人だけでなく、他の命も失われてしまう。そんなに危険な核兵器はまだ世界に多数あります。そして、原子爆弾は戦争で使われ、広島、長崎に大きな被害を与えました。原爆によって苦しんでいる人が今もまだいます。原爆による被害をなくすためには戦争をなくさなければいけません。すると、戦争をなくすためにはどうすれば良い？という疑問が浮かんできました。

被爆アオギリを見学した翌日、全国平和学習の集いがありました。その中の被爆体験講話の質疑で「平和のために戦争が必要という人がいたらどう思いますか？」という質問をしている人がいました。それに対し被爆者の方は「どうして戦争が必要なの？と聞き返します。戦争は欲と欲の戦いだからです。」と答えていました。そのやりとりを聞いて、戦争を止める正しいやり方は、力ではなく話すことだと分かりました。

世界中の人が安心して暮らせるために、世界を平和にしなければいけない。それには1人でも多くの人が平和の大切さと、戦争の悲惨さを知る必要があります。平和記念資料館には様々なものが展示されていました。その中のぼろぼろな制服は普通の日常があったということです。それを一瞬で奪った原爆を忘れて生きていたら、もう一度同じ過ちが繰り返されてしまいます。だから、今も伝える人がいる。そのことを広島に行ったことで分かりました。

最後の日に真っ黒のお弁当を見ました。色々な感情が出てきましたが、それを言葉にするのは、今は難しいです。けど、これからそれを考え続けることが今の自分にできることです。

私は、平和推進事業に行く前は社会や歴史の授業で学ぶことはありましたが、それはほんのごく一部だったと気づきました。事前説明会で西澤さんの戦争体験講話を聞き、図書館で本を借りて読み、実際に広島に行き、見て、聞いて、感じ、意見交換を通して、原爆の怖さ、平和の大切さをより深く考えることができました。中でも特に印象に残っている二つのことを紹介します。

一つ目は原爆死没者追悼平和記念館を見学したことです。原爆犠牲者の名前と写真が壁一面に展示されており、その多さに圧倒されました。一人一人の写真をを見ると、確かにその瞬間まで、この人たちが生きていたことが想像でき、一瞬でたくさんの人が犠牲になった残酷さをより一層強く感じました。地下へと向かう反時計回りの廊下は、過去へと時間を巻き戻し、1945年8月6日8時15分に遡るという強いメッセージが込められた空間です。その先にある追悼空間は、爆心地から見た被爆後の街並みを360度のパノラマで表現されています。まさに自分がその場にいたような感覚になりました。人がたくさんいて、それぞれの生活が営まれていたはずの街並みが、見渡す限り何もなくなってしまった違和感と共に、何もないのではなく、全て壊され、失われてしまったのだと気づきました。

二つ目は、被爆体験講話を4人の方から聞いたことです。私たち中学生にも伝わるように具体的にお話をしてくださったことで、教科書を読むだけでは伝わらない生々しい原爆投下後の被爆者の様子をイメージすることができました。私はお話を聞くだけでも、心が痛くなり、悲しくなりました。また、一緒に話を聞いた他の参加者も言葉を失っており、すぐに意見交換ができないほどみんな、衝撃を受けている様子でした。

被爆者の方々の高齢化が進んでおり、私たちは被爆者の方の話を直接聞ける最後の世代と言われています。直接話を聞くことで私たちは想像し、感じ、考え、学び合うことができましたが、被爆体験を語ってもらうということは、被爆者の方にとって最も辛いことを思い出してもらっていることを忘れてはいけないと思います。また、被爆者の方がお話しされた『日本は唯一の被爆国として、伝えていかないといけない』という言葉通り、私が聞いて感じたことを、家族や友人に伝えていかないといけないと強く感じました。

この平和推進事業に参加して、平和について今までより深く考えることができました。私にとって平和とは、世界中の人が幸せに過ごせることだと思います。しかし、今、核兵器を持っている国、これから造ろうとしている国がたくさんあるそうです。もしいつか、国同士が戦争をしてしまった時、核兵器を使ってしまうかも知れません。その前に、世界に原爆の恐ろしさを伝えて、第二、第三の広島、長崎を作らないようにしたいです。そのためにまず身近な家族や友人、学校の先生や生徒たちに、私が学び感じたことを伝えていきたいです。それが、私が平和のためにできる最初の一步だと思います。

平和記念資料館で見た、被爆者の方々一人一人が歩んできた人生。1945 年 12 月末までに、広島で原爆によって亡くなった人は約 14 万人と推定されています。その「14 万人」の一人一人には、私たちには想像できないほどの人生がありました。14 万人という大きな数字だけでは、一人一人がどのような人生を送っていたのかを想像することは難しいと思います。

そこで、私が聞いたある被爆体験講話者の方のお話を紹介します。その方は、被爆体験講話を聞く私たちに、「原爆が落とされた時代に、タイムスリップをしてみしてほしい」とおっしゃっていました。原爆が落とされた日、何も分からず一瞬にして死んでしまった人、変わり果てたヒロシマを見た人、無傷だったにも関わらず放射線の影響で、だんだんと弱くなっていく人。原爆はたくさんの人の心に深く、一生消えない傷を残したと私は思います。そこで私は、自分自身を 1945 年 8 月 6 日、原爆が落とされた時にタイムスリップしてみるような気持ちで考えてみました。何十人、何百人もの人が倒れている街を歩き、どこにいるのか、生きているのかさえ分からない大切な人を探し歩くことは、想像したくないほど恐ろしいことだと思います。その中でも、私は特に平和記念資料館に展示されていたひとつのストップウォッチがとても印象に残っています。それは、当時被爆したある男性が使っていたストップウォッチでした。その男性にはもうすぐ出産を控えていた妻がいましたが、その子供の誕生を見ることもできずに、男性はほぼ即死だったそうです。そのストップウォッチを見たとき、私は「これはただのストップウォッチではなく、この人が生きていた証なのだ」と感じました。原爆は、直接被爆した方だけでなく、その家族や友人など、周りにいる多くの人々の人生や心までも傷つけるものなのだと、改めて実感しました。遺品や遺骨も見つからず、戦時中の厳しい生活でお腹いっぱい食べられず、自分の夢を叶えること、大切な人を守ることができなかった人たちはたくさんいます。そんな人たちのことを考えると、悲しく、そして何もできない自分を悔しく思いました。しかし、何もできないと思うだけではなく、今の自分だからこそできることがあるのではないかと考えました。

それでは、私たちが今できることとは、何なのでしょう。原爆が落とされた、1945 年 8 月 6 日から 81 年が経った今、被爆者の方々は年を重ね、貴重な当時のお話が聞ける機会が減ってきています。そのため私たちは、被爆者の方々の話を聞き、その記憶を次の世代へ受け継いでいかなければなりません。被爆者の方が恐れていたことは、「原爆の被害について忘れ、また同じ過ちを繰り返してしまうこと」だと話されていました。私たちが広島で受け取った平和へのバトンを次の世代へ受け渡し、私たち自身が平和への希望となることが大切なのだと思います。その積み重ねによって、原爆の記憶を忘れず、二度と同じ悲劇を繰り返さないことにつながるのだと思います。

今回の事業では、新潟では学べない・見ることのできない・体験できないことをたくさん経験できました。今回の事業で被爆者の方からお話を聞いたり、全国の同年代の子どもたちと平和について考えたりすることで、たくさんのことを学ぶことができました。ここでは、特に心に残った被爆体験講話と平和記念資料館について書きたいと思います。

まず、私たちの世代の多くは、人生の中で被爆者の方から直接お話を聞く機会がないと思います。その貴重なお話を3人の方から聞くことができたことをとてもありがたく感じました。その中でも一番心に残ったのは、2日目の「全国こども平和サミット」で聞いた河野キヨ美さんのお話です。河野さんは当時14歳で私と同じ年だったと聞きました。原爆が落とされた後、親も近所の人もいなくなり、心細い中で、いつもとは違う景色を目にし、「助けてください」「水をください」など、多くの声を聞いたというお話もありました。そのような辛い経験をされてもなお、前を向いて生きていく強さがすごいなと思いました。また、「亡くなった方の写真を見たらいつも『学校に行きたかった』『勉強をしたかった』と伝わってくる」という言葉が心に残っています。今私たちが学校へ行き、勉強できていることは決して当たり前ではなく、当時の同年代の人たちは学校に行きたくても勉強したくてもそれができなかったのだと聞き、当時の人たちの願いや、平和な環境を築こうとしてきた人々の思いがあったからこそ今の生活があるのだと思います。河野さんが最後に話されていた「戦争はダメと言い続けて、しっかり生きてください。あなたたちは宝です」という言葉も強く心に残りました。戦争を過去の出来事として考えるのではなく、自分自身にも関係のあることとして考え、平和について行動していきたいと思いました。

次に、平和記念資料館では、私が以前から見たいと思っていた「人影の石」を実際に見ることができました。これは住友銀行広島支店の入口にあった石で、原爆による強い熱線によって、人の影のような跡が残ったものです。私は小学生の頃にこの存在を知り、ずっと実際に見てみたいと思っていました。実際に見ると、写真で見るよりも色の違いがはっきりと感じられ、実物を見ることの大切さを実感しました。また、被爆者の方から放射線の影響によって発疹が出たという話を聞いていましたが、資料館で見た写真は想像をはるかに超えるものでした。色も想像していた薄い赤色とは違い、暗い赤色で、歯や舌にも症状が見られることに驚きました。そのほかにも、当時の破れた服や黒くなったお弁当箱、疎開先で受け取った家族からの手紙など、貴重な資料がたくさん展示されていました。見るのが辛いものもありましたが、実際に自分の目で見ることで、当時の出来事をより身近に感じるすることができました。

この派遣事業で思ったことや感じたことなどを忘れず、貴重なお話を周りの人に伝えながら、ポスターを制作したり、SNSで発信したりするなどして平和について伝えていきたいと思います。今回の旅を通して、今自分が幸せな環境で生活できていること、そしてとても恵まれていることを改めて実感しました。今も世界のどこかで戦争によって辛い思いをしている人がいます。そのことを忘れず、日々の生活への感謝を持ちながら、自分たちに今できることは何かを考えて生活していきたいです。

今回派遣事業の参加では平和記念式典参列をはじめ、たくさんのことを体験させていただきました。特に印象に残ったことは二つあります。

一つ目は、平和記念式典の平和への誓いです。平和への誓いとは被爆 50 年の平和記念式典から始まり、こども代表が述べたもので、翌年以降も続いています。今年の平和への誓いは、たった一発の原子爆弾がどれだけの人の人生を変えたのか、そして私たち若い世代が平和を創り上げるために当時の記憶を受け止め、向き合うことは大切なことだという言葉でした。平和への誓いを讀んだ広島市内の小学 6 年生のお二方の声は、一文字一文字から戦争の悲惨さ、私たちが当時のことを知り、平和を創るために行動を起こしていくことが、どれだけ大切か伝わってくる重みのある声でした。私はこの声、言葉を聞き、当時のことを正しく知り次の世代へ伝えていくこと、平和を創るために小さくても行動を起こしていくことを改めて心に決めました。

二つ目は、全国平和学習の集いです。ここでは被爆者体験講話とグループ・ディスカッションを行いました。被爆者体験講話は、被爆体験証言者の方に原爆が落ちた時と、被爆前と被爆後のことを語っていただきました。私たちにお話をしてくださった方は、対話が大切だとおっしゃっていました。力ではなく対話をするのが、少しでも戦争を減らすことに繋がるのだと思いました。また、意見がぶつかってしまっても、さらに話すことが重要とおっしゃっていました。私は、このことを常に考え、自分の生活に取り入れていこうと思いました。グループ・ディスカッションは様々な地域から集まった同世代の方達と、地元の戦争被害の紹介や私たちが日常にできる「平和を築く行動」について話し合いました。話し合う際には考えを図化し、考えを共有しやすくして話し合いました。私が話し合ったグループでは、まずそれぞれの意見を付箋に書きだし、次に書き出した付箋たちの共通点を見つけ繋げていきました。特に印象に残ったワードは「権力の偏り」です。「今は権利が特定の人に偏っているから平等にできたらいいのではないか」というような考えです。私はこの意見に、驚き・すごい考えだなと思いました。今起きていることや起きたこと、起きるかもしれないことではなく、その事象を起こす人に注目して考えているところがすごいなと思いました。このような考え方がもっと広まれば、世界での戦争は減り平和に近づいていくのではないかと考えたからです。

唯一の被爆国である日本は、今年被爆 81 年となり、被爆者の方々はご高齢となり直接お話を聞くことが難しくなります。

私は被爆者の方々からお話を聞ける最後の世代として、戦争の悲惨さや平和について深く考えるきっかけを得られました。周りの人や次の世代に、このバトンを渡していくためにも、この体験を伝えていきたいです。

1945 年 8 月 6 日。たった一発の原子爆弾により、広島町は焦土と化しました。

あの日から 81 年経った今年、私は戦争の歴史や平和の尊さを学ぶため、広島派遣事業に参加しました。派遣事業を経て、私が特に印象に残っていることは 2 つあります。

1 つ目は、さまざまな国籍、年齢の方が広島を訪れていたことです。以前からテレビや新聞などで、広島を訪問する外国の方が急増していることは知っていましたが、私が思っていた以上に大勢の方がいらっしゃいました。平和記念資料館を見学した際、音声ガイドを聞きながら、熱心に遺品や当時の写真を見つめ、涙を流しながらも真剣に事実と向き合う外国の方の姿を何度も目にしました。また、小学生くらいの幼い子供たちや、他県から訪れたであろう学生も多く目にしました。このことから、戦争の歴史や平和について考えるのに、国籍や年齢は関係ないのだと改めて感じました。世界中の方々が広島を訪れ、戦争の悲惨さを学び、歴史を過去のものとして、自分事として捉えてくださればいいなと思います。

2 つ目は、全国平和学習の集いでの被爆体験講話です。お話をしてくださったのは、8 歳の時に爆心地から 2.5km 離れた自宅で被爆された、現在 89 歳の八幡照子さんでした。原子爆弾が投下された時、突然窓がピカーッと青白く光り、八幡さんは咄嗟に地面に伏せようとして意識を失いました。目が覚めると、八幡さんは爆風の影響で 5、6m 吹き飛ばされており、家の中はひっくり返っていたそうです。避難した山裾では、放射性物質を含む『黒い雨』が降りました。当時の人々はこの雨が危険なことなど知る由もありません。喉が渇き、雨を直接飲んだ人や体に浴びてしまった人など、生き延びた多くの人をも苦しめたのが放射線でした。爆心地近くから逃げて来た人々は、全身大火傷。熱線の影響で皮膚は溶け、男女の区別もつかなかったそうです。ただれた体を引きずる何百人の人はまるで幽霊のようでした。

1945 年 12 月末までに原爆の影響で亡くなった方は、約 14 万人にもなります。また、今もなお放射線の影響や終戦後の差別、家族や友人を失った悲しみなどで苦しんでいる方が大勢いらっしゃいます。原爆は、生き残った者にも辛く、重い現実を一生背負わせたのです。

八幡さんは、ご自身の被爆体験を語るとともに、これから生きる私たちへの不安の言葉を口にされていました。現在、世界には約 12,000 発もの核兵器があります。今、一発でも核兵器が使われたとしたら、人類は滅亡すると。被爆の実相を伝え、世界に警鐘を鳴らし続けることが私の使命だと。

平和な世界を願うこととは裏腹に、現在、世界各地で戦争が続いています。世界平和を実現するためには、「対話」しかないと言います。八幡さんもおっしゃいます。相手と意見が異なる時、敵視するのではなく、相手の気持ちを考え、話し合うことが大切です。私たちの日常生活の中には、意外とたくさん「平和への道のり」が隠れているのかもしれません。

あなたにとって、平和とはなんですか。

今を戦前にしないために、自分の目で歴史を学び、理解し、平和のバトンをつないでいくことが大切です。様々な人と「対話」をして、自分の手で平和な未来を作って行きましょう。

私は今回、新潟市の広島派遣事業に参加して、平和について深く考えることができました。参加する前は、戦争や原爆について学校の授業やニュースなどで知っているつもりでした。しかし、実際に広島を訪れ、平和記念公園や平和記念資料館を見学したり、被爆者の方のお話を聞いたりすることで、今までの自分の考えが大きく変わりました。

特に心に残ったのは、被爆者の方から直接お話を聞いたことです。原爆によって多くの人の命が奪われただけでなく、生き残った人たちも長い間苦しみ続けてきたことを知りました。中でも、被爆者の方が「悪夢のようで生きた心地がしなかった」と話されていたことが強く印象に残っています。私は今まで、生き残ることができたのなら、それだけで幸せなことなのではないかと思っていました。しかし、家族や友達を失った人にとっては、生きていること自体が苦しみになる場合もあるのだと知り、戦争が人の心に残す傷の深さを感じました。

また、平和記念資料館では、原爆によって壊れた建物や当時の人々の生活用品、写真などを実際に見ることができました。教科書や写真で見るとは違い、実物を見ることで、そこに本当に人々の生活があり、その日突然それが失われたのだということを強く感じました。特に、原爆ドームを実際に見たときには、言葉では表せないほどの重みを感じました。今まで写真で何度も見たことがありましたが、実際に目の前にすると、原爆の恐ろしさがより身近に感じられました。

さらに、仲間と一緒に平和について考える集会も印象に残っています。「平和とは何か」と考えたとき、私は最初、戦争がないことや、みんなが仲良く暮らすことだと思っていました。しかし、みんなの意見を聞いていくうちに、平和には一つの答えだけではなく、人によってさまざまな考え方があることに気付きました。私は、平和とは当たり前にあるものではなく、一人一人が大切に、守っていくものなのだと思うようになりました。

とうろう流しでは、平和への願いを込めて行書で「平和」と書きました。川に流れていくとうろうを見ながら、戦争で亡くなった方々や、今も世界で苦しんでいる人たちのことを考えました。平和な毎日を過ごせていることは、決して当たり前ではないのだと改めて感じました。

今回の広島派遣を通して、私は「平和は誰かが作ってくれるものではなく、自分たち一人一人が考え、行動することで守っていくもの」だと学びました。私一人にできることは小さいかもしれませんが、今回学んだことを家族や友達に伝え、戦争や原爆について知る人を増やしていくことはできます。被爆者の方々から聞いた話を忘れず、次の世代へ伝えていくことも、私たちにできる大切なことだと思います。

今年は被爆から 81 年の年です。今回の広島での経験を一度きりの思い出にせず、これからも平和について考え続けたいです。そして、身近な人とのつながりや、今ある日常を大切にしながら、平和な未来をつくるために自分にできることを少しずつ行動に移していきたいです。

1945 年、8 月 6 日、8 時 15 分。広島に原爆が落とされる時、太陽はすでに高い位置にあり、じとっと汗の出る朝だった。通勤や通学、いつも通りの日常を皆が送っていた。81 年後、私はその地に立った。悲惨さとは程遠く、高いビルが立ち並び、公園は綺麗に舗装され、骨組みだけのドームが異様な存在感を感じさせていた。

平和記念資料館に行った。髪の毛はなくなり体の皮膚は鱗のようにボロボロになった人々、眼球が飛び出し、口は溶け変形し、男なのか女なのか、子供なのか大人なのか、高齢者なのか、そもそも人間なのか判断できない状態になった遺体の写真をたくさん見た。私は、遺体を初めて見たのに、変わり果てた人間の遺体の写真を見て、鳥肌が立ち、心から気持ち悪いと思った。見たくなかったが「実際にこんな風が変わってしまった人々がいるんだ」と考えると目が離せなくなった。そして、「自分がもし、これらの遺体の写真のようになったら」と恐ろしくなった。しかし、もう、想像もしたくなかった。爆心地から 2.5km 離れた祖母の家で被爆した八幡照子さんの体験談を聞いた。当時 8 歳で国民学校に通っていた。原爆が落とされた時、母がもう助からないと思い「みんなで死のう！みんな一緒よ」と悲壮な声で布団を被り、肩を寄せ合った家族のぬくもり、絆を「今でも忘れません。」と話された。照子さんは、爆風で 5.6m 飛ばされ額に怪我をし、血だらけになった。両親の体にもガラスの破片が突き刺さった。傷の治療のために、学校の救護場に行くと悲鳴とも叫び声ともつかない、ざわめきが聞こえてきた。教室にも廊下にも大やけどを負った人がぎっしりと横たわり、顔は火膨れで目が開いていなかった。亡くなった人たちは次々と担架で運動場に運ばれ、幾筋も掘られた穴に放り込まれるようにして火葬された。照子さんは「どんなに苦しかったことか。どんなに生きたかったことか。皆、一瞬のうちに全てを失いました。」と声をしぼり出した。そして私たちに「命を大切にしてほしい。命があればつらいことがあっても歩き出せるから。」と伝えてくれた。照子さんは「皆様に聞きたい。あなたの愛する人は誰ですか。あなたの守りたいものは何ですか。今、一発の核兵器が使われたら、あなたの愛する人、守りたいものはなくなってしまいます。それどころか人類が滅亡してしまいます。被爆の実相を伝え、世界に警鐘を鳴らし続けることが今を生きる私にできることです。」と私達に訴えた。

今、私達にできることは、被爆者の思いを引き継ぎ、次の世代へと伝えていくこと。今後、世界が戦争ではなく、対話が活発となり何よりも過去の過ちを繰り返さないことが一歩前進と考える。

最後に、私は、年々少なくなる被爆者の方に貴重なお話を聞けたこと、目で、耳で 3 日間「過去の人間の過ち」と「命の尊さ」を感じ、自分に与えられた命を大切に、これから生きたいと強く思いました。

初めに、「あなたは争いがなく誰もが平和に過ごせる世界は訪れると思いますか？また、そのために自分たちができることについて考えたことがありますか？」僕は派遣事業前、原子爆弾の被害や広島について教科書にあるような表面的で浅い部分しか知らなかったです。なので、自国第一主義が広まり、戦争や内戦が相次いでいる現代社会では、本当に平和は実現するのだろうか？中学生の力で今の世界は変えられるのだろうか？と疑問に思いました。そこで、真相を実際に見聞したり、同じ想いをもつ人々と交流したりすることを通して、事実をより深く学習して、自ら平和に向かって行動できるようになりたいと思い、応募しました。

「私は生き残ってしまいました。」これは13歳で被爆した新井俊一郎さんの言葉です。

新井さんが特に鮮明に覚えていることは、安芸中野駅で全身を火傷し、皮膚が溶けて垂れ下がった人々が歩いてくる光景だそうです。顔が風船のように膨らんでいる幼い姉妹が、手を取り合って「頑張ってるね。」「しっかりね。」と言葉をかけ合っている様子が忘れられないとおっしゃっていました。僕は「なぜ罪のない子供までもが辛い経験をしなければならないのか」と胸が痛みました。また、今、世界のどこかでも無差別な攻撃で苦しんでいる人がいると思うと、やるせない気持ちになりました。

新井さんの小学生時代の級友が亡くなってしまったことを知り、「私と同年代だった子供たちの死を無駄にしてはいけない。話を継承することこそが自分の使命だ。」という言葉が忘れられません。僕は3人の被爆講話を通して、被爆者一人一人に想像できないほど辛い思いを経験させ、今もなお放射能や熱線の後遺症で多くの人の身体だけでなく心の奥深くまで苦しめる原子爆弾の恐ろしさを改めて理解することができました。また、今の日常や日本の繁栄、平和は、当時の人々全員の苦労や頑張りが積み重なったからこそ存在していると思うので、このことを絶対に忘れず、感謝の気持ちを持って過ごしていきたいです。そして、新井さんがおっしゃったように、話を継承し、世界平和へのバトンをつなぐこと、生きたいのに生きられなかった被爆された方々の分まで命を無駄にせず一生懸命生きることが、亡くなった方々への最大の供養だと強く感じました。

次に、全国平和学習の集いでの学びです。ここでは八幡さんの被爆講話、各都道府県の戦争被害者から平和実現に向けてできることを議論しました。僕たちの班では、対話や異なる文化、考え方を理解しようとする姿勢が平和実現に大切だと思ったので、そこから考えを発展させていきました。全国平和学習の集いを通して、全国には同じ志を持ち、平和について本気で考えている人が多くいることを実感しました。また、「平和」は二文字では表しきれないほど奥が深く尊いものであり、答えがないからこそ、世界中全員で団結し合って、少しでも平和に近づけることが大切だと強く思いました。

僕は主に2つの行動をしていきたいと思います。1つ目は、学校の代表として今回得た自分の経験や考えを、しっかりと言語化して、少しでも多くの人に、「行動を起こそう！」「自分達がこれからの世界の舵を切る主役だ。」と思ってもらうことです。そのために、家族や学校の生徒に話をするのはもちろん、僕の学校は平和や戦争について考える土壌があまり整っていないので、総合の授業で考える機会を設けてほしい、と訴えたいです。僕は平和の輪が新潟市から県へ、北陸へ、日本へ、アジアへ、そして世界へ広がってほしいと思っています。2つ目は、何事にも自分の考えをしっかりと持ち、相手の話にも丁寧に耳を傾ける姿勢です。このことは、対話や異なる文化、意見を認め合うことにつながる、平和実現への第一歩だと思います。このように、3日間は言葉では言い表せないほどの貴重なもので、行く前と帰った後では心の芯が大きく変わったような実感がありました。本当に参加して良かったです。

私は今回の派遣事業を通して、なんとなくしか知らなかった原爆の悲惨さを改めて知りました。派遣事業の中で印象に残ったことは、全国こども平和サミットの原爆体験記・原爆詩の朗読と平和記念資料館の見学です。

原爆体験記・原爆詩の中でも一番印象に残っていたのは、香川征雄さんの詩で、一番最後に「ぼくは げんしばくだん だいきらいだ」と書いてありました。その部分を聞いた途端涙が出てきました。子供が率直に書いた言葉だからこそ原爆の恐ろしさがよく伝わってきました。サミットの第2部で他の地域の人が平和への誓いを話していました。その中で平和のためにはいじめをなくすなどがあって、当たり前のことが平和へ繋がっていくんだなと思いました。

平和記念資料館の見学では、原爆で亡くなった人の当時使っていた遺品や、熱線と爆風によって曲がった自転車などが展示されていました。展示物の中で印象に残っていたのが、遺品と一緒に持ち主の最後の言葉や、持ち主の家族の言葉が書かれているところです。亡くなった人は家族を思う言葉を、持ち主の家族は、いなくなってしまったことの悲しみの言葉などが書かれていました。これを見て、急に家族を失ってしまうのがどれだけ悲しいかを改めて考えさせられました。資料館では他にも、被爆した後で酷い火傷を負った写真などや、広島の様子の絵も展示してありました。火傷の写真では、普通に生活していたらできないような、直接火で焼かれたような酷い火傷でした。

二日目に全国平和学習の集いに参加しました。そこでは他の地域から集まった子とユースピースボランティアという地元の中高生の人たちと5、6人の班になって平和について考えました。そこでは最初に八幡照子さんによる被爆者講話がありました。八幡さんは平和のために大事なことは話し合いと言っていました。その後に聞いたことを踏まえながら、私たちが日常にできる「平和を築く行動」について話し合いました。四つの分類を自分で考えた後に、他の人の意見と似ているのをまとめて、関係性があるのを繋げていきました。その結果、私たちの班は話し合いが大事だということになりました。他の班では、いじめをなくすや、お互いを尊重するなどがありました。自分の班で出たことや、他の班の意見を踏まえて日常を送っていきたいと思いました。

私が平和のために、今、できることは、現実で起きたことをしっかり知って覚えて、周りに話すことと、八幡さんが言っていた話し合いをすることだと思います。このことをしっかり広めて戦争を起こさないようにしたいです。

81 年前、8 月 6 日午前 8 時 15 分。大人は仕事に向かい、学生たちは建物疎開作業に従事していた。その多くは、今の私と同じ年頃だった。空襲警報は既に解除され、朝の日差しはもう強く、街には束の間の安心が広がっていた。その平穏な朝は、原爆という一つの兵器によって、一瞬にして奪われた。私は 8 月 5 日から 7 日までの 3 日間、その広島に地に立った。そこにあったのは、信じたくないほど残酷な、けれど変えることのできない過去だった。

私が強く印象に残っているのは、被爆体験講話で聞いた話だ。当時 8 歳だったその方は、窓がピカ一と青白く光った後気を失い、目を覚まして外に出ると、大粒の黒い雨。逃げてくる人達の姿は、幽霊のようだったという。髪の毛は逆立ち、全身大火傷を負い、めくれた腕の皮膚が手の指先にボロ布のように垂れ下がっている。そんな人が何百人も押し寄せて来たそうだ。別の講話でお話されていた方も、人々をお化けのようだったと表現していた。違う場所で違う状況で被爆した 2 人が、揃って人ならざるものに例えていたことに、あの日の光景がどれほど現実離れしていたのかが表れているように感じ、私はゾッとした。

幽霊のようだったという言葉聞いても、私はまだどこかで、それを自分とは遠い出来事のように感じていた。その認識は、資料館でこれでもかというほど思い知らされることになる。

そこにあったのは写真や絵だけではなかった。被爆して亡くなった方が実際に着ていた服、その人の名前や顔。被爆者の一人一人が確かにこの世に存在し、それぞれに人生があり、毎日があった。そして、そのかけがえのない毎日が、壊されたのだという現実を、容赦なく突きつけられる場所だった。思わず目を奪われ、言葉も出なかった。展示されていたある子供の服は、くたびれていて、ずっと小さかった。「当時の中学生はみんな栄養不足で、体が小さかった」——講話で聞いたその言葉が、ふいに蘇った。当時 10 代だった学生たちは、そんな過酷な環境の中、学徒動員で働かされていたのだ。しかも被爆者は、大切な人を奪われただけでなく、その後何十年もの間、いつ病気になるかという不安を抱えながら生きなければならなかった。なぜこんなにむごいことを同じ人間に対して出来るのか、到底私には理解できない。

全国から集まった仲間との話し合いでは、平和について考え、語り合うことの大切さを学んだ。「学んだことを広めたい」「兵器じゃなくて話し合いが必要」「非人道兵器は廃絶すべきだ」——グループの中で交わされた意見は少しずつ違ったが、平和にしたいという根っこの願いは皆同じだった。改めて感じたのは、無差別に民間人を傷付け、人々の当たり前を奪う兵器がこの世に存在していいわけがないということだ。

今、私たちが当たり前だと思っているものは、当時の子どもたちがどれほど望んでも、決して手に入れることのできなかつた自由なのかもしれない。

しかし、式典で読み上げられた平和宣言でも、核兵器不拡散条約の会議が 3 回連続で決裂したことが触れられていた。核兵器は今も世界中に存在し、戦争によって当たり前が奪われ続けている国や人々が今もいる。これを、本当の意味で平和な世界と呼べるだろうか。平和とは、戦争がないことだけでなく、すべての人の自由と尊厳が守られることだと、私は思う。

では、なぜ戦争は起こるのだろうか。自分の国の利益だけを考え、話し合う前に力に頼ってしまうからではないか。だからこそ私は、意見の違う相手の話にも耳を傾け、この 3 日間に見たことを風化させぬよう、これからの世代に伝えていきたい。それが、今の私にできる、平和への一歩だと思う。

「もしも『大切なもの』が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。」

私は、広島平和記念式典で子ども代表のこの言葉を聞き、もし自分が一発の原爆によって大切な人や普段の生活がなくなったら、何が起きたのかわからず、悲しさや恐怖でいっぱいになるのではないかと思います。

これまで私は、戦争や原爆について、教科書や授業を通して知識としてしか知りませんでした。今まで原爆があったという事実しか知らなかった私が、被爆者の方のお話を直接聞くことで、そこに生きていた人々の視点から原爆について考えることができました。また、原爆によって体や心に想像することができないほどの深い傷を負った様子が語られ、私はその事実の重さを改めて感じました。

平和記念資料館では展示されている写真や遺品を見て、被爆者の方のお話を現実としてより深く捉えることができました。原爆によって服だけが残った人、人影の石の存在、家族に向けられた言葉。その一つひとつから、原爆が人々の人生を大きく変えたことを知りました。

初めて原爆の子の像を見たとき、私は佐々木禎子さんについて考えました。禎子さんは二歳のときに被爆し、その後、12歳で白血病と診断されて亡くなりました。原爆による被害は投下された瞬間だけで終わるものではなく、放射線によって、その後を生きる人々の人生までも長く苦しめるものだと思います。

原爆ドームの窓が割れて鉄骨が剥き出しの状態からは、原爆のもつ破壊力の大きさを知りました。

今、世界では広島に落とされたものよりも威力の高い核兵器がすぐに発射できる状態にあります。広島でこれほどの被害が起きたことを知ったからこそ、私は、このような兵器を二度と使ってはいけないということを世界に伝えていく必要があると思いました。

「安らかに眠ってください過ちは繰返しませぬから」

広島平和記念公園にあるこの言葉を読んだとき、ここで起きたことは、過去の一つの出来事として終わらせてはいけないと思いました。被爆者の方から直接お話を聞くことができる今だからこそ、私たちが聞いたこと、見たこと、感じたことを次の世代へ伝えていく必要があります。

広島で聞いた話や、目にした写真・遺品を思い返しながら、私は普段過ごしている何気ない日常について考えました。家族と過ごすこと、友達と笑い合うこと、青空の下で安心して生活できること。今の私たちにとって当たり前に見える日常も、かつて多くの人が突然奪われたものでした。

私が平和のために出来ることは、広島で知った事実を自分の中だけで終わらせず、周りの人に伝えていくことです。被爆者の方々の思いや、原爆によって起きた事実を伝え、一人でも多くの人々が平和について考えるきっかけを作っていきたいと思います。

私は、広島平和記念式典の派遣事業に参加し、平和について深く考える貴重な3日間になりました。今回の派遣では、平和記念式典の参列を中心に平和記念公園内の見学や被爆体験者の方の講話、全国子ども平和サミットへの参加、全国平和学習の集いでの意見交換、とうろう流し、慰霊碑でのお参り、原爆死没者追悼平和祈念館及び平和記念資料館の見学などの活動を行いました。

平和記念公園や平和記念資料館を見学して、原子爆弾の投下によって多くの人の命や生活が一瞬にして奪われたことを改めて身に染みて感じました。平和記念資料館には、当時の写真やそれを表現した絵、被爆した人の持ち物などが展示されていました。僕は展示物を見て原子爆弾の投下が81年前に起きた悲惨な出来事だけではなく、一人一人の人生を大きく変えたり、奪ったりした出来事であったということを感じました。展示物を見ると、戦争によって日常が一瞬にして奪われる恐怖、そして同時に今の日本がどれだけ幸せであるかなどを実感しました。

特に心に残ったのは、被爆体験者の方から直接お話をお聞きしたことです。実際に被爆した方の言葉には、教科書や書物だけでは知り得ない重みがありました。自分と同じように学校へ通ったり、家族や友達と過ごしていた生活が、戦争によって奪われ、今もなお苦しんでいることを知り、戦争や原爆の投下は決して81年前に起こった遠い昔の出来事ではないと感じました。そして、被爆者の方々が自分の辛い経験や思い出したくもないあの日のことを伝え続けられていることにも強く心を動かされました。

平和記念式典に参列しました。全国だけでなく、世界の各国から多くの人が広島に集まり、同じ場所で8月6日の8時15分に黙祷をし、平和への願いを込めていることを体全体で感じました。また、全国子ども平和サミットや全国平和学習の集いでは、他の地域の同年代である中高生が平和についてどのように考え、どんな活動をしているのかを知ることができました。自分一人だけでは行うことができない活動などを知り、平和について考え、行動に移すためには、さまざまな人の意見を聞き、協力することが大切だと思いました。

とうろう流しでは、とうろうに平和への願いや戦争の廃絶を訴える想いを込めました。元安川に流れていくとうろうを見ながら、原爆で亡くなった人々のことを想い、二度と同じような悲惨なことを繰り返してはいけないと思いました。その思いと重なるように夜の元安川には無数の光が灯っていました。その綺麗な景色からはまるで平和を求める声や戦争の廃絶を求める声が聞こえてきているようでした。慰霊碑や原爆死没者追悼平和祈念館、平和記念資料館を訪れたときにも、戦争や原爆の投下によって亡くなった人々や苦しんでいる人々を想い、その記憶を未来へ僕たちが伝承していくことが大切だと感じました。

今回の派遣事業を通して、平和とは単に戦争がないことだけではなく、家族や友達と安心して生活をし、身の回りが危険に曝されていない毎日を過ごせるということでもあるのだと思いました。私たちにできることは、広島で学んだことを忘れず、身の回りや次の世代に伝えていくことだと思いました。原爆の投下から81年という長い年月が経っているため、実際に被爆をされた方が少なくなっています。しかし、戦争や原子爆弾の恐ろしさを知っている人はいます。その人こそが僕たちのように実際に被爆体験者の方々からお話を聞き、戦争や原子爆弾の恐ろしさを伝承していただいた人です。そのような私たちが次は伝承者となって後世に伝えていく必要があると思います。

私は今回、広島平和記念式典等派遣事業に参加し、広島を訪れました。実際に広島で過ごし、平和記念資料館を見学したり、平和記念式典に参加したりすることで、戦争や原爆の恐ろしさ、そして平和の大切さについて深く考えることができました。

特に心に残ったのは、平和記念資料館です。資料館には、原爆によって被害を受けた人々の写真や、被爆した建物の一部などが展示されていました。私は今まで、原爆について学校の授業やテレビなどで学んだことはありましたが、実際の資料を自分の目で見ることで、想像していた以上に大きな被害があったことを知りました。

中でも、原爆によって傷ついた人々の写真や、当時の生活が分かる展示を見たときは、とても心に残りました。そこには、私たちと同じように家族と生活し、学校へ通ったり、友達と過ごしたりしていた人たちがいました。その普通の生活が、原爆によって一瞬で失われてしまったことを考えると、戦争は決して遠い昔の話ではないように感じました。資料を見ることはつらく感じる部分もありましたが、目をそらさずに知ることが大切だと思いました。

また、平和記念公園では原爆ドームを見ることができました。写真で見たことはありましたが、実際にその場所に立って見ると、原爆が落とされた場所であることを強く感じました。原爆ドームが現在まで残されているのは、当時の出来事を忘れず、二度と同じことを繰り返さないためなのだと思います。

平和記念式典にも参加し、日本人だけではなく、外国の人もたくさんの方が平和を願っていることを知りました。私はこれまで、平和は当たり前にあるものだと思っていました。しかし今回の派遣を通して、今の平和な生活は当たり前ではなく、多くの人々の願いや努力によって守られてきたものなのだと気付きました。

今回、広島で実際に見たり聞いたりしたことで、戦争や原爆について、以前よりも自分のこととして考えられるようになりました。戦争を経験していない私たちにはできることは、過去に起きたことを学び、それを忘れずに次の世代へ伝えていくことだと思います。

私は今回の経験を自分だけのものにせず、家族や学校の友達にも広島で学んだことを伝えていきたいです。そして、普段の生活の中でも相手の気持ちを考え、思いやりを持って行動することを大切にしたいです。そして、自分が平和のために出来ることは、今回体験したことを少しでも多くの人に伝える事だと思いました。

私はこの夏、新潟市の代表として「広島平和記念式典等派遣事業」に参加し、広島を訪れました。原爆ドームがある平和記念公園をはじめ、平和記念資料館や広島原爆死没者追悼平和祈念館など、戦争の歴史を深く学ぶことができる場所を巡りました。見学先で被爆された方から当時の体験談を伺い、私は戦争の凄惨さと、この歴史を二度と繰り返してはいけないという「平和への願い」を次世代へ伝えていくことの大切さを、肌で感じることができました。

特に平和記念資料館で私の心に深く刻まれたのは、原子爆弾が投下された翌日に書かれた葉書です。そこには、被爆直後の地獄のような状況で、疎開先の弟たちの無事を願う内容でした。心身ともに苦しみの中にありながら、自分よりもまず大切な家族を思いやる。その葉書から溢れる愛に触れたとき、私は胸が締め付けられるような思いがしました。と同時に、そのような深い愛を持った人々の日常を一瞬で奪い去った原爆の残酷さ、二度とこのような悲劇を招いてはならないと、思いました。

八月六日の平和記念式典には、日本国内の人々、世界百二十三カ国もの代表者が参列していました。これほど多くの人々が同じ場所に集い、祈りを捧げる光景を目の当たりにし、広島悲劇は日本だけのものではなく、人類全体が忘れてはならない出来事なのだと感じました。原爆が投下された午前八時十五分に黙とうが行われた時、八十一年前のこの場所で、人々の暮らしが一瞬にして奪われたのだと思うとともに、もう繰り返してはいけないのだと思いました。今、私が立っているこの地面の下には、かつて誰かの家と日常があったはずです。平和な日常を守り抜くことは、今の時代を生きる私たちに託された重大な使命であると感じ、亡くなられた方々へ心からお祈りをしました。

「全国平和学習の集い」では、全国から集まった中学生と「日常の中で自分たちができる平和を築く行動」について議論しました。平和とは単に武力を使わないことだけでなく、環境保護や経済の安定など、社会をより良くしようとする姿勢そのものだという気づきは、私にとって大きな収穫でした。

私たちの住む新潟市は、広島、長崎、小倉（北九州）などとともに、原爆投下の候補地の一つでした。もし、あの日、風向きや天候が少しでも違っていたら、新潟が広島と同じ運命を辿っていたかもしれません。たまたま被害を免れた私たち新潟市民にとって、広島で学んだ悲惨な歴史や平和の尊さを伝えていくことは、避けては通れない使命です。新潟市の代表として参加した責任を胸に、まずは今回学んだことを家族や友人に伝え、平和が当たり前にある未来を共につくっていきたいです。

平和は待つものではなく、自らの手で築くものです。まずは身近な困りごとを解決し、少しでも平和だと思ってもらえることから、私の平和への行動を始めます。

学校の教科書で学んだ絵や文章。それが私の今までのイメージに過ぎなかったと派遣事業で気がついた。初めて訪れた平和記念資料館の生々しい絵、言葉、展示品を目にした時に衝撃や驚きの連続でした。歴史が教科書を飛び出して圧倒的な重みと現実が迫ってきた。ただ悲惨や残酷と言葉で片付けられない本物の「ヒロシマ」に私は強い衝撃を受けました。

特に私が圧倒されたものは被爆体験です。3人の被爆体験は想像を絶するものでした。8月6日の午前8時15分。とても綺麗な空で暑い日だった。その時突然青白い光がぴかーっと光りものすごい爆発音、煙、炎。皮膚が焼けただれ、男か女かも見分けがつかないものがゆっくりと近づいてくる。まるで幽霊の行列のようにずらっと並んでいた。ヒロシマ市内には沢山の人の死体があり、悪臭が漂っていた。どこに行っても火柱が立っている。放射線を浴びて、髪が抜け落ち、出血や高熱を引き起こす「原爆症」や白血病を引き起こし、すぐに亡くなる方や数日後、数ヶ月後に闘病の末に亡くなる方がいました。そして今も後遺症に苦しむ人がいます。また、遺骨を探しているポスターもあります。ある方の被爆体験では、ハガキ大サイズに白い紙袋が載っているのをみてお菓子だと思い、お腹が空いていて行ってみたら、袋の中身は遺骨で捜しにきた肉親が供養で持ち帰ってきたそうです。話を聞いて、たった一発の原子爆弾で日常が全て失われたことを強く感じました。

8月6日には、平和記念式典に参加しました。沢山の人が集まり、黙祷を捧げました。私はその時に81年前の出来事を考えました。笑顔で笑い合う家族や友達。これから生まれてくる赤ちゃんを楽しみにしていた妊婦の方。一緒に外で遊ぶ兄弟や姉妹。未来がある赤ちゃん。その尊い命が一瞬にして奪われました。もし私がその時代を生きていたら、当たり前の日常が突然無くなることを想像すると、とても怖く言葉では表せないほど悲しい出来事だと感じました。とうろう流しでは、火をつけた瞬間に命が宿るような温かい気持ちになりました。静かに流れていて綺麗でした。

今回の平和学習を通して戦争を過去の出来事として終わらせず、自分自身の問題として核兵器廃絶問題などを考えたいです。広島で見たこと、聞いたこと、感じたことを忘れずこれからも平和について考えて行きたいです。そしてそれをもっと若い世代に伝えていきたいと思いました。最後に、この広島の経験を生かし、今自分が平和のためにできることはこの体験を生かし次世代に繋げることです。核兵器のない平和な世界を実現するためには若い世代からさらに若い世代に繋げて行くことが大切だと強く思いました。

私が、今回の広島派遣事業に参加した理由は、戦争の時代を生きていた人が少なくなっているという現状を聞き、このような機会を逃してはいけないと思ったからです。この事業に参加して、戦争の恐ろしさを「理解した」と簡単に言い切ることは出来ませんが、被爆された方からのお話や、沢山の資料を通して、戦争について深く考えることができました。そのきっかけとなった広島派遣事業の中で特に印象に残っていることが2つあります。

1つ目は、1日目の平和記念公園で見た「原爆の子の像」です。この像のモデルとなった禎子さんは、原爆投下から10年近く経った12歳のときに白血病と診断されました。ですが、急に白血病が発見されました。それは、原爆の放射線によるものです。放射線は目に見えなく、匂いもないので当時の人々は放射線の事など、わかりませんでした。なので、その存在を知った後は自分がいつ放射線によって命が奪われる日が来るのかと怯えながら日々を過ごしている人が今もいるのだそうです。それを聞いて、原爆の恐ろしさを知りました。また、当時、禎子さんは、願いが叶うと言われていた千羽鶴を信じて折り続けました。なので、原爆の子の像の周りには世界中の平和を願う人々から千羽鶴が送られていて、展示されていました。原爆の子の像は、亡くなった全ての子供達の慰霊碑です。多くの子供のこれからの夢と希望を、原爆は一瞬で奪ってしまったのです。辛い思いをした、私と同じくらいの年齢の子、私よりも小さい子達が沢山いたと思うととても胸が締め付けられているかのような気持ちになりました。

2つ目は、2日目に行われた全国こども平和サミットの被爆体験講話です。講話をしてくださった被爆者の方は当時、中学2年生という私と1個しか変わらない年齢でした。原爆が落とされた時、その方は広島にはいなかったのですが、広島にいた姉2人を探すために、お母さんと被爆地を歩き回りました。原爆が落とされた後の広島は、何もありませんでした。普段は建物などで見えないはずの瀬戸内海の似島が見えたのだそうです。そして、目が開けられないほどの悪臭と、同じ人間とは思えないような見た目になっている人々、大量の死体は見たくありませんでした。だけど、見なければ歩けませんでした。本当に怖かった。気持ち悪かった。でも、最後にはどんな人を見ても何も感じなくなったそうです。人々の精神もおかしくしてしまうほどの原爆がとても恐ろしかったです。この方は、戦争の話聞く度に、胸が苦しくなって、痛くなるけれど、このことを伝えなければいけないとおっしゃっていました。声を震わせながら、講話をしてくださった被爆者の方を見て、本当に辛かったです。

最後に、「亡くなった人たちには夢や希望があった。このことを忘れないで欲しい」これは、先程の被爆者の方からの言葉です。私は、この3日間で戦争について真剣に向き合い、「平和」の大切さ、難しさ、重さを知りました。夢や希望に溢れている私たちは、自分の命を大切に日々過ごしていかなければいけません。また、私は平和のために、この3日間で学んだことを身の回りの人に伝承し、戦争の恐ろしさを知ってもらわなければいけないと思いました。世界を平和にするためには、みんなが平和を願うこと、戦争を経験した人の苦しみや思いをよく理解することが大切だと気づきました。私は、未来の子供達が笑顔で過ごせる世界を願っています。

まず1日目に学んだことは、平和記念公園の見学と島田廉子さんの講話です。平和記念公園では、被爆した六本のアオギリの木や佐々木禎子さんという方の像などがありました。アオギリの木は、市内東白島町の旧広島逓信局の中庭（爆心地から約1300m）で被爆し、爆心地側の幹半分が熱線と爆風により焼けてえぐられましたが、その傷跡を包むようにして成長を続けている。1973年（昭和48）5月に現在地へ移植されました。後々「アオギリのうた」という歌も作られた。佐々木禎子さんの像は、2歳の時に被爆した佐々木禎子さんが亡くなった後、同級生らが「原爆で亡くなったすべての子どもたちのために慰霊碑をつくろう」と呼びかけ、全国の3200余りの学校や世界9か国からの寄付などにより、1958年5月5日に完成したものです。像の高さは9メートルで、その頂上には折り鶴を捧げ持つ少女の像が配されています。そして島田廉子さんの講話で聞いたことは、まず中学生が学徒動員や建物疎開を強制的に命令されてやらされました。建物疎開をするということは隠れる場所がなくなるということになってしまう。食糧不足になったのでそれで思いついたことが農家の手伝いをすれば食べ物がもらえと思い農家に7月12日から手伝いを始めた。田んぼの雑草を取るときは特にイネで足がチクチクしたりヒルに足を噛まれ血がすごく流れる。8月6日朝を迎え、電車を待っていると8時15分、原爆投下。目の前が強く光り、色が紫色からピンク色になってそして火まみれ。火山の噴火そのもののように。人が幽鬼の群れ。ガラスの破片が散乱。2倍も顔が膨れていた。包帯のようなものは、皮膚が垂れ落ちたものだった。日本は戦後民主国家になった。

2日目に学んだことで印象に残っていることは、平和記念式典への参列やとうろう流しです。平和記念式典への参列では、小学生や中学生他にも外国人の観光客や偉い人たちも参列していました。話では、広島市長や内閣総理大臣、広島県小学生代表の方達の話などがありました。総理の話では、今の世界では核が脅しの武器になっている。だから今すぐにでも核を無くさなければいけないなどの話をしていました。話を聞く前までは今の世界の現状をあまり詳しく知れていなかったのもっとニュースなどを今までよりも見て行きたいと思います。そして子ども代表の話では、私たちは被害者の方の話を聞けるのは最後の世代です。私たちにはこれから何をしていくか考えていかなければいけません。これからは私たちが前の世代の思いを受け継いでいきましょう。などを話していました。会場の雰囲気はとても蒸し暑く緊張感、ざわめきのような雰囲気が強く高かったです。とうろう流しでは、日本人もいたけど外国人はすごく多かったです。結構びっくりしました。とうろう流しをする前はどうやって綺麗に四角で立てるのか疑問に思っていたけれども、木の板でうまく立てていてすごかったです。

そして3日目は、平和記念資料館の見学に行きました。見学してみて、特に思ったのは、大火傷を負った人たちの跡がすごかったです。8時15分で止まった時計やメガネの片方だけが残っていたり、佐々木禎子さんが折った折り鶴もたくさんありました。その他にも弁当箱や三輪車、自転車、ストップウォッチ、革ケースと万年筆など多くの展示品がありました。

今回は多くの学びがあつてそれにたくさんの思い出もできて本当に参加してよかったと一生思っています。これから一生心に刻んで行きます。

「人間と核兵器の共存は絶対に無理だ」。広島での平和学習を終えた今、私はこの言葉を強く心に刻んでいる。私がこの平和学習で最も印象に残っていることは、被爆者の方の講話だ。話者は、14歳で入市被爆をした。動物が焼けたような悪臭と全てが破壊された街。髪は縮れ、皮膚が爪先からただれていて、真っ赤な体の鬼のような人々が街中に溢れかえっていたそうだ。原爆の恐ろしさは事実としては知っていたが、本やニュースで聞く話とは重みが違った。声のトーンや喋り方から、思い出すのが辛く、苦しいこと、そして、核兵器の恐ろしさが伝わってきた。聞いているだけで、言葉に表せない切なさや、胸が締めつけられる思いがした。そして、講話の中で、原爆によって一瞬にして未来を奪われた子どもたちの話があった。子供たちは戦時中、多くの我慢をしながらも、夢や希望を持っていた。しかし、たった一発の原爆は、それらをないものとした。また、「生きて行くのも地獄」という言葉が印象的だった。自分は生き残っても、家族や友達、多くの人が亡くなって、悲しみと絶望で満たされていた。被爆者は、終わりのない心身の苦しみを抱えながら生きていかなければならない。

私たちは、その後平和記念資料館を見学した。そこには、被爆者の血のついた衣服や焼け焦げた品、原爆で亡くなった人々の写真や遺品などが展示されていた。講話を聞いた後だったからこそ、そこにある一つ一つの遺品が、ただの「展示物」には見えなかった。そこには、それを使っていた人の生活があり、家族との時間があり、これから先の未来があったはずだ。もし、自分が家族と突然引き離されたら、もし、別れを言うこともなく、大切な人と二度と会えなくなったら。そう考えると、胸が苦しくなった。中でも「死の黒斑点が出た兵士」の写真の、生きる気力を無くしたような目が忘れられない。しかし、核の悲惨さを訴えているようにも感じた。この兵士は撮影された三日後に亡くなったという。心身ともに私たちが想像できないくらいに苦しかったと思う。このような人が多くいたと考えると苦しくてたまらない。私は、彼が「第二の広島は決して作ってはいけない。核はとてつもなく恐ろしいものなんだぞ!」と強く訴えていると感じた。たった一発の原子爆弾が、全てを破壊し、人々に終わりのない苦しみを与え続けている。そして、世界には今も1万2000を超える核兵器が存在する。世界では「核が最大の戦争抑止力だ」という考えがあり、私もこの平和学習の前は、一理あると考えていた。このように恐ろしい核兵器が背後にあったら、恐ろしくて戦争はできないと思っていたからだ。しかしこの平和学習を通し、核がある以上は苦しむ人が永遠にいることを学んだ。私は、人間と核の共存は絶対に無理だと思う。

私は、平和の実現のため、自分の目を見て、学び、考え続ける。そして、友達や家族、学校で伝え、議論していきたい。広島で受け取った記憶を受け継ぎ、信じる未来のために、自ら行動し、周りを動かす力に変えていきたい。

私はこの三日間たくさんのことをこの目と耳で学びました。私が訪れた広島は、空は青く草木が青々と生え伸び、人々が行き来する賑やかな街でした。昔の広島も賑わっていました。しかし 81 年前、ここはたった一発の爆弾の投下により空は雲で覆われ、草木は燃え、家や店は崩れ、人々はとても眩い光と爆風で死に追いやられ、放射線により苦しみました。一瞬で賑やかだった広島は破壊されてしまいました。その状況を見た人は「まるで地獄だ」と思ったそうです。

三日間の学習期間の中で特に印象に残ったのは資料館と被爆者の方たちの声です。資料館では「原子爆弾」、この爆弾たった一発の爆弾でどれほどの被害が出たのかが一目でわかる場所でした。原子爆弾が投下された時、地表は 3000 から 4000 度にまで上がり、爆心地から 1.2 キロメートル以内にいた遮るものがない人々は、体の内部までに達する大火傷を負い、そのほとんどが即死、または数日のうちに命を落としてしまったこと。鉄さえも溶けるこの尋常ならざる高温は、人々の衣服と皮膚を一瞬で焼き尽くし、髪はちぢれ、体が腫れ、爆風で割れたガラスが突き刺さり、まるで幽霊のような姿になってしまったこと。街の万物や肉親の遺骨さえも瓦礫と溶け合わせてしまうほどの威力について想像もつきませんでした。今回、資料館の写真や絵、被爆者の方の遺品などが当時の姿のまま展示されているのを見て、改めて原爆の恐ろしさと亡くなった方々の最後まで生きたかったという強い思いが感じられました。

被爆者の方々の声で印象に残ったのは、被爆当時の感情とこれから生きる私たちへのメッセージです。今回講話を聞かせていただいた被爆者の方たちは 4 歳から 14 歳に被爆されました。被爆者の方達は被爆した広島と人々の姿を見て、「恐ろしい、怖い、気持ち悪い」といった感情が 1 番に出てきたそうです。81 年経った今でも、犠牲になった方々への申し訳なさや自責の念で強い悲しみと苦しみを抱えておられました。私たちに 1 番伝えたいメッセージは「自分の命を大切にしたい」だそうです。原爆で亡くなった方たちは、たくさん勉強したかった、友達や家族と楽しく過ごしたかった。生きたくても生きられなかった人たちの分、今戦争のない日本で生きている学生の皆さん方には自分の命を大切にしたいと強く語っておられました。今回貴重なお話をしてくださった方たちは「こんな辛い思いをもう二度と誰にもさせたくない」と強く願っておられました。これからの時代を生きる私は今回の講話を聞いて、今まで犠牲になられた方々の気持ちを繋ぎ、戦争というものの危険性を訴えて行こうという勇気が一段とつきました。

そして私は今回、他県の中学生と「平和とは何か」「平和を実現するためには何をすべきなのか」「平和のために、今できること」を話し合いました。今起きている身近な戦争をもとに様々な面から改めて考え、今自分がすることは「戦争の恐ろしさを忘れず、価値観が違っていたとしても、相手を尊重し対話で解決に繋げること」だと思いました。まだ先が見えない世界にも少しでも良い変化が訪れるよう、戦争の恐ろしさを伝え、命を大切に生きていきたいです。

4 新潟市非核平和都市宣言

新潟市非核平和都市宣言

わたしたちのまち新潟市は、
日本海に面した湊町、また、実り豊かな田園地帯として発展してきました。
いま、市町村合併によって、新・新潟市に生まれ変わり、
水と緑に恵まれた魅力ある国際都市として、
本州初の「日本海政令市」を目指しています。

先の大戦で、わたしたちは、尊い生命や貴重な財産を失いました。
新潟市は、広島・長崎と並ぶ原爆投下予定地のひとつでした。原爆を恐れ市民が一斉避難した日もありました。
あれから60年。
わたしたちは、現在のわたしたちの暮らしが、戦争による多くの方がたの尊い犠牲の上に成り立っていることを
忘れてはなりません。そのことを後世に伝えていかなければなりません。

核兵器の廃絶と世界の恒久平和が、わたしたちの永遠の願いです。
しかし、いまだに世界各地で紛争が絶えません。
飢餓、貧困、差別、人権侵害、環境破壊……、平和な暮らしを脅かすものが、世界に満ちています。
わたしたちの暮らす北東アジアでも緊張関係が続き、核兵器の脅威が強まっています。
わたしたちは、核兵器の不拡散、そして廃絶を強く訴えます。

わたしたちの安心で安全な暮らしを脅かす全てのものを無くすこと。
地球上の全ての人がとが、平和で豊かな暮らしを送ること。
地球全体が、共生互惠関係を築き、ともに繁栄発展すること。
それが、わたしたちの願いです。世界の人びとの願いです。
わたしたちは、そのために不断の努力を重ねていきます。

海のむこうは、友となる国々に。
わたしたちは、世界の平和のかけ橋となります。
子どもたちの未来のために、
わたしたちの暮らす北東アジアの人びとが、世界の人びとが手を取りあって、
日本海を「平和の海」に！

新しい新潟市誕生の記念すべき年に、
核兵器の不拡散、そして廃絶を願い、
環日本海の友好・交流の拠点都市として、
北東アジアをはじめ広く世界に向けて、
新潟市が非核平和都市であることをここに宣言します。

2005年10月10日

新 潟 市

令和 8 年度
広島平和記念式典等派遣事業
令和 8 年 8 月
発行 新潟市総務部総務課